

「ハゲタカ」とは何か？

－その実態と対策－

松野 渉

国立情報学研究所

オープンアクセス（以下、OA）に関する取り組みが学術出版における主要なトピックとして扱われるようになって約 20 年が経過した。OA とは、学術的な成果（より狭義には査読済みの学術論文を指す）に、インターネットを介して誰でも無料でアクセス出来ることを指し、その実現手段としてセルフアーカイビングと OA ジャーナルの二つがあることがよく知られている。読者から費用を回収する従来の学術雑誌に対し、OA ジャーナルは主に論文著者からの投稿料によって出版費用を捻出するモデルとなっている。こうした投稿料は一般に APC（Article Processing Charge）と呼ばれる。

この APC を不当に搾取していると考えられているのが所謂「ハゲタカ出版社」「ハゲタカジャーナル」（以下、「ハゲタカ」）と呼ばれる存在である。この「ハゲタカ」については国内でもこれまで、大学を始めとする研究機関や学協会、文部科学省などから研究者らに対して注意喚起がなされてきた。

しかし、いずれの学術出版社・学術雑誌が「ハゲタカ」に該当するかを判断することは実際には非常に難しい。「ハゲタカ」に該当する出版社・雑誌タイトルを挙げる「ブラックリスト」なども存在するが、その信頼性について、ステークホルダーの間で完全なコンセンサスが取れているとは言い難い。また「ハゲタカ」自身もより巧妙に、自らが「ハゲタカ」であることが露見しないようにしている。

問題の一端は、学術雑誌の質を担保する査読が伝統的に匿名で実施されてきたことにある。誰がその学術論文を査読したのかが公開されないことは、学術的な公平性を担保する上で重要であるが、一方でその匿名性の高さが「ハゲタカ」の跋扈する現状を招く一因となっていると言える。こうした問題に対して現在、査読の透明性を確保するための様々な試みが始まっている。

そういった主な試みの一つとして挙げられるのが Clarivate Analytics が提供する Publons などをはじめとした、査読登録サービスである。論文著者や査読者、出版社が査読者や査読コメントを登録するサービスで、査読者や査読の記録、査読コメントなどを明らかにすることが可能となる（査読者やコメントなどの情報は公開レベルの選択が可能）。こういったサービスの利用によって査読の透明性を高めることが出来ると考えられている。

「ハゲタカ」に関する問題は研究者コミュニティの間で深刻な問題として取り扱われている。同時に、学術出版・学術雑誌に関する問題である為、図書館職員をはじめとした情報サービスに従事する職員も常に関心を払うべきトピックスであることは論をまたない。今後、より一層複雑化していくことが予想される「ハゲタカ」問題について、研究者により迅速に情報提供や注意喚起をしていくことが求められている。